

| | |
|--------------|---|
| Title | 近代スポーツの社会学的考察：近代日本スポーツを中心に |
| Author(s) | トソプソン, リー |
| Citation | 年報人間科学. 1985, 6, p. 49-64 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/5192 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部（一九八五年二月）
『年報人間科学』第六号 四九頁―六四頁

近代スポーツの社会学的考察

—近代日本スポーツを中心に—

リー・トンプソン

近代スポーツの社会学的考察

——近代日本スポーツを中心に——

スポーツを社会学的な立場からとりあげる試みはかなり以前からあるが、それが活性化したのは一九六〇年代に入ってからである。^①

これらの研究には様々なアプローチが見られる。これはいいことであるが、なかにはスポーツという概念をあいまいにとらえているものもあるように思う。スポーツをとりあげる以上、スポーツの概念規定を最初からある程度明確にしておいたほうがよい。

スポーツはまた、他の社会的制度と同じように、歴史の産物である。スポーツの現状を理解するには、その歴史を見る必要がある。

開国以降、欧米で発展した近代スポーツが日本に導入された。従って、日本における近代スポーツを理解するには、近代スポーツ一般の歴史と日本におけるその歴史とを検討しなければならない。

本稿では、以上の点に留意しながら、日本における近代スポーツをとりあげてみたい。

概念規定

H・エドワーズの『スポーツの社会学』は「その分野を包括的に

とらえようとする唯一の著作である^②」と評価されている。エドワーズはアメリカのスポーツ制度を分析の対象にしているが、彼が展開するスポーツの概念規定はアメリカだけに限られるものではないから、ここで参考にしたと思う。

エドワーズはスポーツと関連のある五つの行動の類似性と相異点を検討することによってスポーツの概念規定を行っている。その五つの行動とは、play, recreation, contest or match, game, として sport である。

①遊び^③。エドワーズは、カイヨフに従って、遊びは自由でなければならぬと言う。自発的に遊び始め、遊び続け、遊び終える自由な行動でなければ本当の遊びではない。そして遊びはその行為自体の外部からのあらゆる影響や利害関係や関心事などから隔離しなければならない。同じように、遊びはそれ以外の目的、目標や意味とは無関係である。また、実用的でないものでなければならぬ。遊びの産物が実用的でないだけでなく、その過程も実用的でない（以下「レクリエーション」参照）。遊びの世界はメーク・ピリーの世界であり、遊ぶ人は日常の生活とは違った役割を楽しむ。最

後に、遊びにはルールがないとエドワーズは言うが、ルールは極めて柔らかいと言いかえた方がいいように思う。遊びを含む全ての社会的行為にはそれなりのルールがあるが、遊びのルールは制度化された、形式的なものではなく、つねに変わりやすいものである。遊ぶ人はそのルールによって縛られていない。

②レクリエーションは遊びに近いが、少しだけ違うところがある。『広辞林』（一九七三年）はレクリエーションを次の様に定義している。「仕事や勉強の余暇を利用して、スポーツ・芸術などに親しみ、精神的・肉体的に新しい力を盛り返すこと」。つまり新しい力を盛り返えすことがレクリエーションの目的である。この目的もつゆえに、日常的な利害関係から完全に隔離しているとは言えない。つまり、レクリエーション行動の産物は実用的ではないが、その過程は実用的である（新しい力を盛り返えす）。また、その目的は自発的な参加をある程度規定する。

以上の定義は日常的な使い方と変わらないが、以下の三つは日常の使い方とは少し違うので注意しなければならない。

③contest や match は競技や試合と訳せるが、英語と同様、この二つの単語はエドワーズが指摘するニュアンスをかならずしも含んでいないように思う。

エドワーズによると contest や match の参加や結果は個人的である。個人対個人が体力、速さ、忍耐力、正確さ、器用さなどを争うのが contest や match である。個人は自発的に競技に参加し、競技の結果は個人だけが負うものである。

ところで、本当の意味での競技はもうすでになくなってきているのではないかとエドワーズは言う。なぜなら、本来個人的なものであったはずの競技が個人的なものでなくなり、個人がある特定の集団を代表する場合が多くなってきたからである。特定の集団の代表者が行う競技や試合をエドワーズはゲームとよんでいる。

④ゲームにおいては、参加者は集団を代表する。ゲームの結果を、集団の全ての成員が共有する。ゲームの目的は、単なる参加がもたらす利益を超える。ゲームの勝利を通じて、集団はその影響力や地位の向上などを図る。集団のためという名目で、成員の参加を強制することもある。集団の名声がかかっているので、ゲームが真剣に行われがちである。

⑤スポーツは、ゲームと同じように、集団的なものである。選手は集団を代表する。（一九八四年のロサンゼルス・オリンピックのマラソンで優勝を期待されながら十四位に終わった瀬古利彦のコーチ、中村清の発言は極端な例である。「大和民族はもつとしつこい体質をつくらねばならないと思う」。朝日新聞（夕）一九八四・八・十三）。

スポーツはゲームと違って肉体的な競争でなければならないし、正式で明文化されたルールと歴史、そして更新される記録をもっている。

スポーツの産物は実用的であるが、その過程はかならずしも実用的ではない。単なる参加がもたらす利益以上のもの（名声、影響力など）をスポーツを通じて獲得しようとする。従って、選手は強制

的に参加させられることがありうる。つまりスポーツへの参加は必ずしも自発的ではない。そして細心な準備が必要とされる。

一般的に「スポーツ」という場合、エドワーズのような限定した意味では使っていないように思う。エドワーズが区別する遊び、レクリエーション、コンテスト、ゲームのどれも、日常の会話の中では「スポーツ」と表現される場合がある。従って、同じ「スポーツ」と言いながら、レクリエーションを期待する人や集団の代表を期待する人など、相容れない期待をもつ人が対立することになる。

本稿ではエドワーズの限定した意味でのスポーツについて検討したいと思う。集団を代表するということはスポーツとゲームを他の類似の行為から区別する点である。後にこの点にもどるが、ゲームとスポーツを区別するのは、スポーツの明文化されたルールとその歴史である。エドワーズによると、スポーツはゲームから進化する⁽⁸⁾ゲームのルールが公式化され、その伝統や歴史が正しく記録されていると認識されれば、ゲームはスポーツになる。

以下、マンデルの *Sport: A Cultural History* によりながら、近代スポーツの歴史を見よう。

近代スポーツの歴史

マンデルが言うように、正確に言えば他の時代と他の社会における類似する行為を全部「スポーツ」と表現するのは正しくないかも知れないが、他にいい表現がないし、従来「スポーツ」が使われ

てきたので、混乱を避けるために一応同じ「スポーツ」で表現することに⁽⁹⁾する。

我われ以前のほとんどの社会においてのスポーツ競争は、宗教儀礼の一部として行われた⁽¹⁰⁾。古代ギリシャ人にとって、スポーツの勝利は神々から祝福を賜っていることを意味した。例えば「イリアッド」の中でオデュッセウスは、彼を守る女神アテーナーの干渉によって徒競争に勝利を収める。古代ギリシャ人にとっては神々の干渉は別に不公平ではなかったようである⁽¹¹⁾。

近代以前のスポーツと較べて、近代スポーツは近代の社会的、政治的、経済的生活への特定の適応である⁽¹²⁾。マンデルによると近代スポーツは二つの別個な起源から発生した⁽¹³⁾。

その一つは、イギリスやアメリカにおける産業革命とその発展の土台になった新しい物質的、文化的状況であった⁽¹⁴⁾。

陸上競技会のフィールド種目のほとんどはイギリスの大学生によって発明された。トラック種目の距離も彼らによって標準化された。水泳、ボート・レース、競馬の距離もイギリス人によって標準化された。イギリス人はフットボールのゴールポスト、ボクシンググローブ、ストップウォッチなど、多くのスポーツ用具を開発し、標準化した。現在行われているほとんどのチーム・スポーツもイギリス人によって「開発」された(つまり彼らはそれぞれ違う形で行われていたさまざまなゲームのルールを固定して、明文化したのである)。ところでイギリス人によるこのスポーツ革新は、以上の具体的、形式的なものにとどまらない。ハンディキャップ、賭け率(odds)、

そしてスポーツのアマチュア、フェアプレー、スポーツの記録などは、思想や文化の変化を示唆する。そしてこれらの新しいものは産業革命と関連しているとマンデルは言う。

スポーツの記録はそのいい例である。マンデルによると、スポーツの記録は新しいものである⁽¹⁶⁾。スポーツ記録は時間と空間の数量化、そして測定できる業績に対しての鑑賞力を前提とする。そして、これらはイギリスで始まった産業革命の前提でもあった。また記録という概念は進歩 (Progress) の思想の上に立っている。新しい記録は古い記録の改良でありながら、いつか自ら改良される可能性と必然性を含んでいる⁽¹⁶⁾。

もう一つ産業化・近代化との関連としてあげられているのは賭事の変化である。「イギリスの賭事は他のイギリスの革新の土台となつた世界観の存在の証拠であるかも知れない」とマンデルが言う。賭をする産業革命前後のイギリス人は、宗教の儀式を正確に行つたからではなく、馬や走者についての情報や判断が相手より自分の方が優れているから勝利を収めたというふうに考えた。これは賭事の合理化と言えよう。

産業革命との関連であるが、資本家が投資するとき、一種の賭をしていくわけである。確率論や合理的な分析はスポーツだけではなく、市場と産業生産にも適用された。

産業革命にもなつて合理化、標準化、測定、計算などはイギリス社会に吸収された。これらの属性はイギリスのスポーツの特長でもある。製造業や市場と同様、イギリスのスポーツは能率とそのは

つきりした証拠としての、統計的に実証でき表現できる業績を重視するようになった。当時の行政や法律におけるの動きと相まって、スポーツは法典化され、そのルールは明文化された。そのルールは (裁判官にあたる) 各スポーツの役員や審判員によって実施されるようになった。

従つて近代スポーツは近代化へのメッセージを含んでいると言えよう。そしてこのメッセージは普遍的である。競争の条件が標準化されたことによつて、どこでも、いつでも、時間的、重量的かつ速度的に優れた業績を正確に測定することができるようになった。ルールの法典化と明文化はスポーツを地域的なものから普遍的なものにした。このイギリスで始まったスポーツが伝えられた場所の一つは日本であるが、そのことは次項でとりあげる。

ところでマンデルは近代スポーツのもう一つの起源をあげている。それは、釣り合いのある教育を主張する啓蒙主義の産物であった。ドイツを初めとする中央ヨーロッパを中心に人類の発展と進歩を促進するための新しい身体運動が開発された。現在の体操の始まりである⁽¹⁷⁾。これらの体操は合理的に考え出されている。流派によつて、道具の使い方や体操の内容に多少の違いはあったが、全体的には似たものであった。(といっても、将来のためによりよい人間と社会を作りあげようとする当事者の意図からすると、小さな違いでも大きな意味をもつた)。この意識的な人間形成という点において、イギリスのスポーツとは違つて、意図的にイデオロギイ的であった。

ドイツ、スウェーデン、デンマーク、オランダ、チェコスロバキ

アなどにおいて、それぞれの体操運動があった。そしてこれらの全ての運動は単なる身体の訓練だけでなく、成員の結束によるイデオロギーと政治的な目的をもっていた。運動会の絶頂は多人数（時には数千人にものぼった）で同時に行う体操であった。ユダヤ人のシオン主義者が結成した体操組織さえあった。

二〇世紀の初めになると、これらの体操運動とその組織を政治的な目的を促進するために利用できることが明確になった。ヒトラー以前のドイツにおいて、左派と右派の政党には対立するスポーツ組織があった。そして政治的な連帯感を強化するための市民体育は、ファシズム・イタリア、ナチ・ドイツ、そして後にソ連とその影響力の下にある国々の政策の一部になった。

以上の二つの起源から発達したスポーツの合体が、近代オリンピックに代表される近代スポーツである。マンデルによると一九三六年のベルリン・オリンピックにおいて、近代オリンピックは成熟した形に達した。国家の内外の政策を促進するために国家はオリンピックの資金を出したのである。⁽¹⁸⁾

二つのスポーツ伝統が合体するには、やはり両者の妥協が必要であった。大陸型のスポーツの体操（特にスウェーデンのそれ）は大衆の健康を強調するあまり、数量化された測定方法で評価できる、個人による演出への発展をきらった。ドイツの体操は、統計や演出を指向する関係者の努力が実って、オリンピック種目になった。⁽¹⁹⁾

一方、イギリス型のスポーツは、政治色が濃くなったオリンピックに「汚染」され、エドワーズが言うコンテスト的な要素が薄らい

で、国を代表する義務を負わされた。

こうして近代スポーツは、歴史的・地域的な条件に基づく二つの側面をもち、二種類のメッセージを含んでいる。すなわち、一つは近代化のメッセージであり、もう一つは国家の統合のメッセージである。

日本における近代スポーツ

次に、主として木下秀明『スポーツの近代日本史』⁽²⁰⁾によりながら、日本における近代スポーツの展開について見よう。

文明開花とともに近代スポーツは日本に上陸する。最初にとり入れたのは軍であった。

幕末から、幕府だけではなく、諸藩も洋式訓練を次第に採用するようになった。その洋式訓練に体操は欠かせない方法であった。この時とり入れられた体操は、木馬跳越などの器械体操と陸上体操が主体であった。明治七年に新陸軍の戸山学校体操科が設置され、体操は陸軍全体へ普及するようになる。射撃、フェンシング、乗馬、洋式水泳なども、軍事上の必要から軍隊によってとり入れられた。

明治十一年に、学校における体育方法の選定と教員養成のため、文部省は体操伝習所を設置した。体操伝習所は、名前通り、体操の導入に全精力を傾けた。スポーツにも関心を示し、後に学校体育に一部のスポーツが認められたが、長い間学校体育の主流は体操であった。

前項で見たように、体操はドイツを初めとする中央ヨーロッパで、意図的に開発され、後に政治的に利用されることになった。日本の当局における体操の導入もその一例であろう。

「御墨付」で導入されなくても、欧米との接触によって多くのスポーツが日本に紹介された。イギリスで標準化されたスポーツは外人居留地から、または留学帰国者によって、そして学校で欧米人教師を通じて摂取された。その担い手の主役は「欧米の新知識を学びながら、欧米スポーツをも身につけ、常に欧米の水準を意識しながら、やがて日本の発展のために貢献する使命を自覚していた学生である。」この状況下で行われた欧米スポーツは「欧化主義にもとづく近代化のバロメーター」⁽²¹⁾として見られがちであった。

その背景について、木下は次のように述べている。「殖産興業富国強兵をスローガンに掲げた明治時代は、あらゆる分野で、日本が欧米先進国の水準に到達することに関心をはらった時代である。このことはスポーツの分野においても、同様であるし、むしろ、競技スポーツが勝敗という優劣を明確に示す形態を備えていたため、国力のバロメーターと見做された戦争と同様、スポーツは日本の国際水準を知る指標の一つとして受けとめられていた。戦争の場合は、勝敗が直接国運を左右し、多くの犠牲を必要とした。このため、それなりの慎重さと覚悟と国家的意志の統一とが不可欠であり、安易に戦争に飛込むことはできなかった。しかし、スポーツの場合には、その結果と重大性を顧慮する必要は全くなかったし、国家的な意志統一の必要もなかった。このため、安易に国際競技は実現できた。」⁽²²⁾

こうして国力のバロメーターとして国際試合を見ていた人びとは「勝てば先進国に達したと喜び、負ければ選手の不甲斐なさに後進国的劣等感を露骨にした」⁽²⁴⁾という。

当初、国際試合といっても、相手は外人居留地のよせあつめチームの場合が多かった。日本人が欧米から学んだスポーツで欧米人を破った最初は明治二九（一八九六）年五月、一高野球部が横浜外人を二九対四で負かしたときである。「たかがスポーツ試合にもかかわらず、戦争の勝利と同様の国家的事件と受けとめた」⁽²⁵⁾。当時の喜びようが「向陵誌」に次のように書かれている。「総代守随啓四郎起きて曰く、今日の勝利吾校の勝のみならず邦人の勝と称するを得べし謹んで選手の労を謝すと、松田野球部長曰く国名を賭すること実に守随君の言の如し……」⁽²⁶⁾。

こうして近代スポーツは近代化についてのメッセージを含んでいるだけではなく、欧米の近代化を象徴するところもあった。

マンデルが言うように、標準化されたスポーツの記録を通じて、地理的な理由で直接に競争し合うことができないもの同士の競争も可能になる。明治三〇年代後半の藤井実一〇〇メートル及び棒高跳においての「世界的記録」はその可能性を生かして、東大浜尾総長の名で各国に通知された。

しかし、現在の日本のスポーツは欧米から摂取されたものだけではない。といっても、伝統的なスポーツ（これらを「スポーツ」とよんでもいいかどうかは別として）は現在まで続いているわけでもない。衰退して消えたスポーツには犬追物、投扇、揚弓、手鞠など

がある。何らかの形で保存されている在来スポーツには蹴鞠、打毬、力石、木場のいかだの角乗り、やぶさめなどがある。しかしこれらは日常的なスポーツとしてではなく、それぞれの保護会によってかろうじて祭として現在に伝わっているだけである。

一つだけ消えず現在目覚ましい成功を収めているのは相撲である。しかし、相撲も変化していく世の中で生き残るためにやはり自ら転形しなければならなかった。そのきっかけとなったのは、明治四二年に完成された相撲常設館の「国技館」であった。「国技館での興行開始と同時に、場所入りの幕内力士は羽織袴の着用を義務づけられ、見物人から勝力士に投げ与えられた財物を受けることは禁止された。力士は芸人ではなく、国技を担う士分であることが強調されたのである。また、行司は、袴から、えぼし、ひたたれ、の神主スタイルと改められ、相撲は日本古来の神事、すなわち国技であることを強調された。そして東西制がとられ、その優勝旗争奪を採用したことは、個人プレーの団体化によるナショナルリズムの強調に通ずる時流の反映でもあった⁽²⁷⁾。それまでに京都や大阪などにあった独立した団体は、国技館の建設と天皇賜盃（大正十四年）に意気入っていた東京相撲に吸収された（昭和二年完成）。

前述した、やぶさめと、大追物、は、在来武術（この場合弓術）のスポーツ化したものである。また、それぞれの武術の練習方法は、実戦から遠ざかると、スポーツに近くなる面もあった。

例えば剣術において、十八世紀中頃練習のための防具や竹刀などが開発された。当初、竹刀は真剣と同じ長さであったが、竹刀試合

では長い竹刀の方が有利なため、長い竹刀を使用するものが多くなった。この結果、真剣試合のための練習とは離れた竹刀打、すなわち「撃剣」が道場練習の主体となった。この実戦に通用しない撃剣は、剣術の練習法をスポーツ化したものである。しかし、幕末の黒船騒ぎのように、実戦が重視されるようになる場合、武術のスポーツ化にブレーキがかかる。

在来武術の中で一番早くスポーツ化に成功したのは柔道である。そしてオリンピック種目になるなど、一番成功が大きいとも言えよう。

木下によると、江戸時代の柔術はマイナーな武術であった。武士は本来武器をもって戦うはずであり、弓馬劍槍術が重視された。

ところで、維新後、欧米の近代武術が導入され、日本の在来武術が衰退した。生活の基盤を失なった一部の武士によって明治六年に見せ物として「撃剣会」興行が行われたが、一時のはやりの後、消滅した。また、同じ明治六年から、旧藩の水術師範たちは隅田川などで、生計の手段として庶民を相手に水練場を再開した。

西南戦争（明治十年）をきっかけに、武術再興論が起り、帯刀禁止（明治九年）という条件下で、武器を使用しない柔術が注目されるようになった。

このころに青年期を迎えた嘉納治五郎は「柔術の修行をはじめた頃……には武術としての柔術にしか関心はなく、講道館柔道を展開する素地はまったくなかったと考えられる。この彼が、短時日のあいだに講道館柔道を考案するようになる原動力となったものは、彼

の大学生活を通して身につけた欧米的教養、なかでもイギリスのスポーツ観以外に考えられない。

すなわち、嘉納の示した講道館柔道の理念は、『体育』と『修身』のための競技としての『勝負の法』であって、武術ではなく、道^レを講ずるための方法として在来の武術諸流を取捨選択したのが柔道^レという技法であった。それ故、彼の柔道は単なる柔術の発展ではなく、古い武術としての柔術から、新しい教育法としての柔道へと脱皮したものである。この柔道という運動による心技体についての教育という点で、柔道は体育であり、また、スポーツであった。このような運動観は、まさにイギリス的な近代スポーツ観そのもので、在来武術の修行だけでは到達することのできないものである。このように、古い柔術が新しい柔道となるためには、欧米の新文明に接した高度の知性を欠かせなかつた⁽²⁸⁾。

木下は、マンデルのように近代スポーツの起源を二つに分けず、近代スポーツの原動力をイギリス的な近代スポーツ観であると見ているらしい。たしかにイギリスのスポーツの発展にも啓蒙主義にもとづく教育的な意図がなかつたわけではないが、マンデルが言うように、柔道の哲学的土台と組織は、むしろ体操を制度化したドイツとスウェーデンの理論家の試みを思わせる⁽³⁰⁾。

とにかく柔道にならって、剣道や弓道のように、多くの在来武術が武道に転化していったのである。

スポーツとナシヨナリズム

以上見てきたように、他の分野と同じように、日本のスポーツは欧米との接触によって大きく変わった。多くの欧米スポーツがとりにいれられて、在来スポーツが衰退しただけではなく、武道や相撲は近代スポーツの影響を受けて大きく変わった。このような状況下で、スポーツを行うには外国^{||}西洋を意識しないはずがない。前述の通り、国際試合を国力のバロメーターとして見る傾向が強かつた。

木下は、このこと背景には「日本のスポーツ観」があつたと述べ、その三つの側面は

①ナシヨナリズム的スポーツ観 ②武士的スポーツ観 ③後進国的スポーツ観である⁽³¹⁾。

しかし、エドワーズによる概念規定などと照らし合わせてみると、この三つは日本独自のものであるとは言えないことが分かる。

①ナシヨナリズム的スポーツ観

別のところで木下はこれを「あらゆる分野で、先進国の水準に到達しようとする国家思想に基づく全体主義が、スポーツにもち込まれたこと⁽³²⁾」というふうに表現している。選手は文字通りの「選ばれた人」であり、「自分を選んでくれた仲間、すなわち全体に対する責任を自覚しなければならなかつた」という。そして選手でないものは選手を「自分達の分身のように感じて応援し、選手のプレーや勝敗を自分達全体のプレーや勝敗として受けとめたのである」という。

これはエドワーズがスポーツ一般について指摘していることである。つまり、選手は集団を代表して、試合や競技の結果は成員の全てがともにするということである。

程度の差はあっても（集団を代表することの意味は社会によって異なるかもしれない）日本独自のものではない。国際試合においては、その集団は必然的に「国」になる。当事者である選手の意志にかかわらずなく、「国」を代表することが強いられている。これは一九三六年のベルリン・オリンピック以降定着している。

② 武士的スポーツ観

前述のように、武術が武道に転化した過程はスポーツ化の過程であった。ところが剣道などで見られるように、実用性を重視する傾向はスポーツ化にブレイキをかけたのである。この完全にスポーツ化しない武道が土台になっているのは武士的スポーツ観であると木下は言う。そして欧米スポーツにもこういう見方はもちこまれたと言う。つまり「旧幕時代の武士に求められた敗北⁽³³⁾恥⁽³⁴⁾死、あるいは勝利⁽³⁵⁾誉⁽³⁶⁾生という倫理が、近代のスポーツの勝敗にうけつがれた」ことである。

いわば勝利至上主義のことであるが、これもエドワーズが「試合の目的は参加そのものの利益を超える」と指摘していることである。つまり、勝利によって、影響力や名声を得ることができるといふことである。これも別に日本独特なものではない。集団を代表することと名声や影響力がかかっていることが絡んで、勝利至上主義が生まれる。そして先にもふれたように、少くともベルリン・オリンピ

ック以来、このことは国際的レベルで行われるようになった。

③ 後進国的スポーツ観

前に、「勝てば先進国に達したと喜び、負ければ選手の不甲斐なさに後進国的劣等感を露骨にした」という国際試合の見方についてふれた。ここで木下はスポーツにおけるマナーを問題にしているように思う。

木下によると、後進国のスポーツにおいては「行なり者と行なわない者の間にいちじるしい断層を残している⁽³⁷⁾」。結果としてこのことは「無知で無責任な応援」である野次を生む。野次馬根性は日本的スポーツ観に入っていると木下は言う。

しかし、言うまでもなく日本以外の国々のスポーツ試合にも野次がとぶ。近代スポーツの祖国であるイギリスにおいてさえ、試合の展開を妨害する観客による暴力（*goose hoolliganism*）は社会問題になっている。そしてこの暴力はスポーツとしてのサッカーに原因があるのではなく、サッカーの観客の主体となっている労働者階級が直面している諸問題を反映している、と言っているのはテーラー⁽³⁸⁾である。従って、もし日本のスポーツの応援のし方に問題があるとすれば、その原因をスポーツにはなく、より広い社会制度に求めた方がいいかも知れない。しかしこのことをここで追求することはできない。

以上検討したように、国力のバロメーターとしてスポーツを見ることは一つの新しい解釈図式として、ベルリン・オリンピック以来ほぼ定着している。この見方では、スポーツにおけるの優越はその

国の他の分野、つまり統計的に優越を証明できない分野、スポーツとは違って肉体的にめぐまれた少数の人びとを育てることによって業績があがらない分野、生活様式や哲学などにおいての優越の証拠である。そしてこの見方は古代ギリシャにおける儀式的なスポーツの意義を思わせる⁽³⁶⁾。というのは古代ギリシャにおいても、スポーツの勝利は集団（都市国家）の優越を示めすものであった。もつとも、それは生活様式や哲学の優越ではなく、神がみや天の恵みのあらわれと見なされたのであるが。

スポーツが国力の正確なバロメーターでありうるかどうかはともかくとして、そのように見ることによって「我ら」と「彼ら」との区別ができる。コーザーなどが言うように、他の集団との葛藤は当の集団のアイデンティティーの確立と再確認に貢献する。葛藤によって集団は周囲の社会的環境との境界を維持する⁽³⁷⁾のである。スポーツにおけるナショナルリズムは相手の外人との区別によって「我ら」のユニークさを強調し、集団内の連帯感を強化する⁽³⁸⁾。

パーソナルの用語を使えば、スポーツは主に統合とパターン維持の機能をもっている⁽³⁹⁾。スポーツは集団の連帯感を強化し、集団の価値体系やイデオロギーを反映する、と多くの論者が指摘している⁽⁴⁰⁾。

しかしA・クラークとJ・クラークが言うように、国際試合に参加する国々はそれぞれ違う「彼ら」像をもつ⁽⁴¹⁾。アメリカ人にとって、オリンピックなどの国際試合よりも、国内のスポーツの方がずっと大事であるが、国際試合に関心を向けるとき、そのライバルとして意識するのは、ばくぜんとした「外人」でも、一部の地域や人種で

もなく、イデオロギー的に対立するソ連を初めとする共産主義の国々である、とマンデルは指摘する⁽⁴²⁾。

二つの例だけをあげる。アメリカ人のコラムニストのマックス・ラーナーが言うには、ソ連は一九八四年のロサンゼルス・オリンピックに参加しなかったゆえに（にもかかわらず？）そこで「負けた」⁽⁴³⁾。不参加によって選手を通じて全世界（特に第三世界）に自国のイメージを送る機会を棄てたからであるという。彼はソ連対アメリカという図式は全世界が意識しているものであるかのように論じている。

またやはりアメリカ人のコラムニストのマイク・ロイコは「近代オリンピックが面白いのはサポーターをはいた冷戦だからだ」と述べ、ソ連などの共産主義の国々が参加しなかったロサンゼルス・オリンピックは退屈だったという。（ロイコはバレーボールがオリンピック種目であることを知らなかったとも述べている。国際スポーツにおけるバレーボールの存在が大きい他の国の人びとはその発言にこそビックリするであろうが、国によって国際スポーツの見方が違う一例である）。

リアダンによるとソ連の指導者もスポーツを資本主義との競争においての重要な武器と見なしている⁽⁴⁴⁾。

日本では第一に「我ら」と「彼ら」を区別しているのはこういうイデオロギー的なものではない。近代日本のスポーツ史の概要をみたように、日本の国際スポーツは、他の分野と同じように、欧米との競争を意識している。「彼ら」外人は主に人種的に、そして人種

を通じて地域的に区別される欧米人である。日本のファンを熱狂させるのは「小さな日本人が大きな外人を気力で倒す」過程である。

戦後、それを果してくれたのは水泳の古橋とボクシングの白井、そして何よりもプロレスの力道山であった。日本のプロレスの主流は外人レスラーとの試合であり続けてきた。⁽⁴⁶⁾

しかし、このパターンはスポーツの経験からできあがったものではない。資源のない国・日本が人材、つまり日本人を資源にして高度経済成長を成しとげたという、日本人一般の認知は、まさにこの「小さな日本人(資源のない国・日本)が気力、精神力で(よく働くことよって)大きな外人(資源にめぐまれている国、西洋の近代産業国)をたたきのめす(経済活動の競争相手として貿易黒字をあげる)」というパターンのもとになると言えよう。⁽⁴⁷⁾

このパターンを現在のスポーツ報道に見ることができる。マラソンの事例をとってみよう。

一九八二年三月七日に名古屋で行われた中日ロードレース(男子三十キロ、女子二十キロ)で、女子でアメリカのキャシー・トミナーが優勝して、二位は増田明美であった。トミナーの一時六分五二秒、増田の一時六分五五秒はともに従来の世界最高記録を大きく上回っているが、翌日の朝日新聞(名古屋版)は「増田、二〇キロで世界記録」と大きな見出しをつけた記事を出している。また、一日の「週間報告」に、同じ見出しをつけた概要記事がのって、次のように報告している。

「名古屋市で行われた中日ロードレースの女子二〇キロで、増田

明美(成田高)は一時六分五五秒の世界最高記録を出した。一位は米のキャシー・トミナー」。

言うまでもないが、世界最高記録を出しているのはトミナーである。トミナーの後に増田がゴールインしたとき、記録はすでにトミナーによって書きかえられている。しかし、日本人の増田の業績を称えるあまりに、報道側はこうした言い過ぎをおこしてしまった。

また体のサイズについていえば、パターンは「小さな日本人が大きな外人を」となっているが、一五〇センチ、三八キロの増田は「小さな日本人」の代表として最適であろう。しかし、「大柄なトミナー選手」や「どちらかといえば大柄なランナー」と書かれたトミナーは、実は一六二センチ、四九キロである。一六二センチ、四九キロというと、大柄と言えるであろうか。

一九八〇年に行われた「学校保健統計調査」によると、一七歳の女性の平均身長は一五七センチ(標準偏差五・〇二センチ)で、平均体重は五二・一キロ(標準偏差六・六三)であった。⁽⁴⁸⁾つまり、トミナーは平均的な日本の一七歳の女性より一つの標準偏差ほど背が高いが、体重は平均より三キロ軽い。アメリカの女性はもとより、日本の女性と比べても決して「大柄」といえるほどの大きさではない。ちなみに、女性の体のサイズのもう一つの例を見てみよう。米国の初の女性宇宙飛行士サリィ・ライドについて、同じ朝日新聞は「身長一六五センチ、体重五二キロで、米国女性としては、むしろ小柄なほう」というふうに書いている。⁽⁴⁹⁾「大柄」なトミナーより三センチほど背が高く、三キロ重いライドが「小柄」なのである。

新聞記者はいちいち統計表を見ているわけではないとか、トミーとライドのそれぞれの記事のコンテキストは違うから比較にならないというような反論はあるかも知れないが、まさにその通りである。統計上ではなく、「日本の星 増田明美」(原文のまま)に對する

トミーは、パターンによって「大柄」にならざるを得ない。そして「小柄で、むしろひ弱にもみえる体つき」のどこに、底知れない力を秘めているのか」や「小さな体に、超人的なスタミナを秘めた増田」などの表現で、増田の活動が神秘化されている。

こうして「小さな日本人が、大きな外人を氣力で倒す」というパターンは、さまざまな「事実」を無視したりゆがめたりしながら守られている。

もう一つの例をあげよう。

一九八三年二月一三日に東京マラソンに瀬古利彦が優勝した。

翌十四日の朝日新聞はこれを一面に報道して、その書き出しに「強豪の外国選手らを抑えて」という文句で、まず日本人対外人のテーマを設定する。

しかし、瀬古は一七〇センチ、五九キロで、小柄とは言いがたい。同じく「学校保健統計調査」によると一七歳の男性の平均的身長は一六九・七センチで、体重は六〇・六キロであった。瀬古はこの平均とほとんど変わらないのである。

おまけにレースを五キロから三〇キロの間リードをしていた「強豪の外国選手」の一人、タンザニアのイカンガーは一六三センチ、五四キロと本物の小柄であり、瀬古が最後に追いこした外国選手の

ゴメス(メキシコ)でも、正確なサイズは明らかでないが、瀬古とならんでいる写真からみると体つきはあまり変わらないようにみえる。

この場合、体の大きさについては何も言えないが、パターンが不用品になったわけではない。

「小さな日本人対大きな外人」という設定のもとに、日本人はもとも身体的にハンディを負っているという考えが秘められている。そのハンディは体の大きさにも現われているが、それに尽きるわけではない。体つきそのものもハンディである。

瀬古は小柄とは言えないが、その日本的な体つきがハンディになっている、そしてハンディをのりこえたのは、氣力、精神力であるということ、次の文章は言おうとしている。

「一七〇センチ、五九キロ。胴長でいかにも日本人といった体つき。その瀬古が世界に通用する力を発揮できるのは、精神力の強さがあるからだろう」。そして一七頁のスポーツ面、二一頁の社会面にも、瀬古の「底知れぬ力」を、増田について書かれたと同じ言葉で称えている。

瀬古は負傷して一年十カ月ぶりの出場であったが、正に「小さな(身体的にハンディを負った)日本人が、大きな(「強豪の」)外人を氣力で倒す」パターンの好例になるように報道されている。

この種の報道は日本人の一般的な社会意識を反映しているだけでなく、それをつくりあげてもいる。ギアアツは、バリ島の闘鶏を考察して、それはバリ人によるバリ人の経験の解釈である、つまりメ

タ社会的コメンタリーであるという。全ての芸術にはどういふ「機能」があると言ひ。

スポーツとそれについての報道もギニアツの言うメタ社会的コメンタリーとみることができる。本稿では、そのような観点から、日本の近代スポーツとスポーツ報道について、大ざっぱではあるが自分なりの解釈を試みた。

注

- (1) 文献の一部の断片的な紹介は菅原社「スポーツ社会学の研究系譜『体育学研究』二二・一—一九頁にある。また John Hargreaves (“Sport, Culture and Ideology,” in Jennifer Hargreaves, ed., *Sport, Culture and Ideology*, London: Routledge & Kegan Paul, 1982) はスポーツ社会学の現状を批判的に考察している。
- (2) Hargreaves, John, op. cit., p. 32
- (3) Harry Edwards, *Sociology of Sport*, Homewood Ill.: Dorsey Press, 1973, pp. 44-49.
- (4) Ibid., pp. 49-50.
- (5) Ibid., pp. 50-52.
- (6) Ibid., pp. 52-55. 尚、井上俊次による「ゲーム」の概念は、『スポーツとゲーム』(『遊びの社会学』中央経済社、1977, pp. 6, 9.)
- (7) Ibid., pp. 55-58.
- (8) Ibid., p. 57.
- (9) Richard D. Mandell, *Sport: A Cultural History*, New York: Columbia University Press, 1984.
- (10) Ibid., p. 5.
- (11) Ibid., pp. 38-39.

- (12) Ibid., p. 3.
- (13) Ibid., p. 262.
- (14) 以下、Ibid., ch. 7, “England, Land of Sport,” pp. 132-157 を参照。
- (15) マンデルは蹴鞠や三十三間堂通し矢などに言及し、これらに「発生的な」記録があったと認める。そして、イギリス以外の社会における記録概念の存在について、語学の壁があるため自分が知らないだけであるという可能性を認める。ただ、以下にふれる時間と空間の数量化の産物としてのスポーツ記録は、産業化と近代化と関係しているように思ふ。

- (16) Ibid., p. 245.
- (17) 以下、Ibid., ch. 8, “Induced Sport,” pp. 158-177 を参照。
- (18) Ibid., p. 245.
- (19) Ibid., p. 173.
- (20) 木下秀明『スポーツの近代日本史』古林新書、一九七〇年。
- (21) 同書、一二二頁。
- (22) 同。
- (23) 同書、一一〇—一二二頁。
- (24) 同書、一一一—一二二頁。
- (25) 同書、一二三頁。
- (26) 同書、一二四頁。
- (27) 同書、一七八頁。
- (28) 同書、三二—三三頁。
- (29) Dennis Brailsford, *Sport and Society: Elizabeth to Ann*, London: Routledge & Kegan Paul, 1969 参照。
- (30) Mandell, op. cit., p. 102.
- (31) 木下、一一六頁。
- (32) 日本体育協会『スポーツ百科事典』大修館書店、一九七〇年、二四頁。
- (33) 同。
- (34) 木下、一一六頁。

- (32) Ian Taylor, "On the Sports Violence Question: Soccer Hooliganism Revisited," in Jennifer Hargreaves, op. cit.
- (33) Mandell, op. cit., p. 236.
- (34) Lewis Coser, *The Functions of Social Conflict*, Glencoe, Ill.: The Free Press, 1956, p. 38.
- (35) Alan Clarke and John Clarke, "Highlights and Action Replays" — Ideology, Sport and the Media," in Jennifer Hargreaves, op. cit., p. 80.
- (36) Gunther Luschen, "The Interdependence of Sport and Culture," *IRSS**, 1969, 2, p. 136.
- (37) Edwards; Hargreaves; Litschen; J. Michael Schwartz, "Causes and Effects of Spectator Sports," *IRSS**, 1973, 8, 3-4, pp. 25-45; M. J. Saraf, "Semiotic Signs in Sports Activity," *IRSS**, 1977, 12, 2, pp. 89-101; Gary Smith, "A Study of a Sports Journalist," *IRSS**, 1976, 11, 3, pp. 5-26; Rex Thompson, "Sport and Ideology in Contemporary Society," *IRSS**, 1978, 13, 2, pp. 81-94; Michael R. Real, "Super Bowl: Mythic Spectacle," *Journal of Communication*, 1975, 25, 1, pp. 31-43, 以上のものにおいては、スポーツの機能は仮説的でしかとらえていない。スポーツにおける社会統合とスターン維持に関連する一連の実証的な研究は藤原健固によって発表されている（『社会統合に及ぼすスポーツの機能に関する一考察』『社会学論叢』七七、四八一—六一頁。「集合意識に及ぼすスポーツの機能に関する一考察」『体育学研究』二四—一、三九—四九頁。「政治的社会化とスポーツ」『中京体育学研究』二一—一、六七—八五頁。沢田誠一共著「マス・メディアとスポーツ・コミュニケーションに関する一考察」『中京体育学研究』二二—一、一—一四頁）。スポーツの社会的機能を実証的にとりあげようとする試みは評価すべきであるが、藤原の研究は様々まの問題をかかえているように思う。まず概念化 (conceptualization) であるが、例えば社会統合をとりあげた研究で団体・組織への加入がスポーツが及ぼす社会統合を示す指標として使われているが、

社会統合という概念が団体・組織への加入で十分とらえているからでは疑問である。

概念の操作化 (operationalization) も必ずしも明らかでない。どういふ団体・組織への加入が社会統合の指標として使われているか、どういふ質問項目によって「疎外感」を計ったかなどが明らかでないため、読者にはこれらの指標が何を意味しているか分らない。

また、調査は一般地域住民を対象にした無作為アンケートによるものであるが、被調査者の四七パーセントは学生である。

- (41) Clarke and Clarke, op. cit., p. 66.
- (42) Mandell, op. cit., pp. 235-236.
- (43) Max Lerner, "The True Impact of the Games," *The Japan Times*, September 5, 1984, Copyright L. A. Times.
- (44) Mike Royko, "The Bottom Line on Un-Olympian Athletics," *The Japan Times*, August 31, 1984, Copyright Chicago Tribune.
- (45) James Riordan "Sport and Communism—On the Example of the USSR" in Jennifer Hargreaves, op. cit., pp. 213-231.
- (46) 仲村祥一他「スポーツ・エトピア」の「ロマン」『スポーツ番組論』読者クラブ、一九七二年、一〇八—一二二頁。
- (47) Endymion Wilkinson, *Misunderstanding—Europe vs. Japan* (Revised Edition) Tokyo: Chuokoronsha, 1981 (1982), pp. 135, 149, 238.
- (48) 文部省大臣官房調査統計課『指定統計第一五号学校保健統計調査報告書昭和五十五年度』一九八二年。
- (49) 『朝日新聞』一九八三年八月一日、一三頁。
- (50) 『朝日新聞』一九八三年二月一日、一七頁。
- (51) Clifford Geertz, "Notes on the Balinese Cockfight," in *The Interpretation of Cultures*, New York: Basic Books, 1973.

* IRSS = International Review of Sport Sociology.